

(博士課程)

論文審査及び最終試験の結果

学位申請者	新井 春美	学生番号	610751
申請学位 (専攻分野)	博士 (安全保障)	専攻	安全保障
論文題目	トルコの国家アイデンティティと対外政策 Turkish State's Identity and Foreign Policy		
成績	論文審査及び最終試験		
	合格		

平成25年11月11日

拓殖大学学長 殿

審査員主査

山上 高司



審査員

鈴木 祐



審査員

森 伸生



審査員

石井 賢太郎



審査員

印

審査員

印

学位申請日	平成23年10月31日
受理審査会	平成24年 2月25日 可決
論文審査	平成24年 2月26日 から 平成25年11月10日まで
最終試験	平成25年11月11日

(注) 論文審査及び最終試験の成績は「合格」「不合格」の評語で記入すること

申請学位： 博士(安全保障)
学位申請者 新井 春美(アライ ハルミ)
所属： 国際協力学研究科安全保障専攻博士後期課程 6D751
単位取得満期退学(平成 24 年 3 月 23 日)

論文題目： トルコの国家アイデンティティと対外政策
英文題目： Turkish States Identity and Foreign Policy

審査委員会： 主査 海外事情研究所 教授 川上 高司
副査 海外事情研究所 教授 鈴木 佑二
副査 イスラーム研究所 教授 森 伸生
副査 目白大学社会学部 教授 石井貫太郎

I 論文の要旨

本論は、国家アイデンティティと対外政策の相互作用を明らかにすることを目的としている。国際社会の事象の多くは、国家がアイデンティティの確立を求め、アイデンティティに従って行動した結果として生じたものである。アイデンティティは「われわれ」と「他者」を分けたり、国家がなりたいと望む姿を表現したりする。

国家アイデンティティは「内発アイデンティティ」、「公的アイデンティティ」、「外因アイデンティティ」の 3 種類に分類できる。アイデンティティは概念であり、アイデンティティ自体が主体となり何かを行うわけではない。アイデンティティの保有者が、どの要素が重要であるかを決定し、それを政策に反映する。そして国家はその政策を用いて国際社会から「アイデンティティの承認」を受けようとする。すなわち、周囲のイメージ（「外因アイデンティティ」）と自己認識の一致を目指すのである。政策が成功すれば政策決定者の選択の正しさが明らかになり、支配の正当性が保障されるとともにアイデンティティにも正当性が付与される。

本論は、こうした特徴を持つ国家アイデンティティが国家にいかなる対外行動を選択させるかを、トルコ共和国の建国初期からの対外政策・外交事例によって検証を試み、以下の結果を得た。

トルコにおいては建国以来、イスラームに代表される「内発アイデンティティ」は、「西洋アイデンティティ」を持つエリートによって否定されてきた。エリートは西洋の一員であるという「公的アイデンティティ」を上位に位置づけ、対外政策に公的アイデンティティを反映させ、親西側路線の外交が展開されていた。しかし、1980 年代以降、国内統合のためにエリートによって「内発アイデンティティ」に焦点があてられるようになると、トルコは西洋でもありイスラームでもあると主張して、親西側路線に優先を置き

つつ外交の多元化が見られるようになった。

「西洋アイデンティティ」の根拠となったのはケマリズムであり、ケマリズムの擁護者としての国軍は他のアイデンティティを排除し、「公的アイデンティティ」の生産・再生産を担ってきた。しかし「公的アイデンティティ」の証明となる EU 加盟のための国内改革は、イスラーム的価値と西洋的価値を併せ持つ「新しいエリート」を登場させた。「新しいエリート」は、国際社会において中心的な役割を果たすという独自の外交方針へと変更させていった。

すなわち、トルコにおいてはアイデンティティのランク付けという「階層化」と、複数のアイデンティティが同時に存在するという「重層化」が生じているのが特徴であり、これらの構造がエリートによって構築・操作され、対外政策に反映されてきたのである。そして、対外政策の遂行は国内にエリートの交代と、それに伴う対外政策の変更をもたらしていることが検証された。

II 論文の構成

はじめに

第1章 アイデンティティ研究の展開：国家アイデンティティ研究

第1節 アイデンティティ研究の俯瞰図

(ア) 心理学的アプローチ：個人

(イ) 社会学的アプローチ：社会化と集団化

第2節 国際関係論とアイデンティティ研究

(ア) アイデンティティ研究の理論的発展(リアリズム・リベラリズム)

(イ) コンストラクティビズム

(ウ) 可能性と限界

第3節 3つの国家アイデンティティ論

(ア) 内発アイデンティティ

(イ) 公的アイデンティティ

(ウ) 外因アイデンティティ

(エ) 異なるアイデンティティの相互作用

第4節 内発、公的アイデンティティと外因アイデンティティの関係

第2章 トルコの国家アイデンティティの形成

第1節 歴史的経緯とアイデンティティ形成

(ア) オスマン帝国の残滓

(イ) トルコ共和国の成立と西欧社会との距離感

第2節 民族的アイデンティティと国家形成

第3節 外交政策とアイデンティティ形成

- (ア) トルコ・ヨーロッパ関係
- (イ) 冷戦
- (ウ) グローバリゼーション
- (エ) イスラーム的価値感とキリスト教的価値感の対立と融和

第3章 トルコにおける政策決定者グループ

第1節 トルコのエリート構造

- (ア) トルコの政策決定の特徴
- (イ) トルコのエリート

第2節 時代的変遷—何がエリートを生んだのか—

- (ア) 建国の経緯と国家建設の荒波
- (イ) 民主化の進展
- (ウ) 対外危機—軍の再台頭
- (エ) イスラームの復権—内発アイデンティティのルネッサンス

第3節 エリートのアイデンティティの継承

第4章 トルコ外交と公的アイデンティティの形成と修正：建国期—1970年代まで・・・58

第1節 公的アイデンティティの形成と定着

- (ア) トルコ共和国の形成とエリートの誕生
- (イ) 欧州システムへの接近
- (ウ) 公的アイデンティティの形成と強化
- (エ) 外交危機
- (オ) OIC との関係と参加

第2節 国内のアイデンティティの多様化

- (ア) 新たなアクターの台頭
- (イ) 軍内部での左翼思想の拡大

第5章 公的アイデンティティの再生産とトルコ外交：1980年代のエリート内政治

第1節 アイデンティティの再生産プロセス

- (ア) 公的アイデンティティの無秩序化
- (イ) 1980年クーデタ
- (ウ) 9.12体制
- (エ) オザルの勝利による正当性の確立

第2節 「欧州のムスリム」の強調

- (ア) カリスマ政治の台頭
- (イ) オザルの経済政策
- (ウ) オザルの対外政策と欧米関係

(エ) EU 加盟失敗と国内政治: キプロス問題との違い

第6章 ポスト冷戦のトルコ外交

第1節 冷戦の終焉と地政学の再興

(ア) 中央アジアの再発見

(イ) トルコの中央アジア進出

(ウ) バルカン問題におけるトルコの役割

第2節 新たなるアイデンティティの模索

(ア) 「懸け橋」アイデンティティの登場

(イ) 「トルコ・モデル」外交の推進

(ウ) NATO 域外活動とトルコ軍の役割

第3節 汎トルコ主義の挫折とアイデンティティの再確認

(ア) トルコ主義の限界

(イ) トルコ政治の混乱

(ウ) 2.28 過程の発生—再生産の発動

(エ) 「穏健保守」政権の誕生と「トルコ的なアイデンティティ」の定着

第7章 ケマリズムの継続とケマリズムへの挑戦

第1節 トルコ外交におけるケマリズムの役割

(ア) ケマル・アタチュルクの6原則

(イ) ケマリズムの担い手

(エ) ケマリスト外交のダイナミズム

第2節 ケマリズムへの挑戦

(ア) 国内改革とエリートの不満

(イ) イスラーム主義の台頭

(ウ) 世俗主義に対する挑戦とアイデンティティの再生産

第3節 トルコ: アイデンティティ再生産のメカニズム

(ア) 外的環境の変化

(イ) 民主主義の深化

終章

第1節 国家アイデンティティ

第2節 5つの問題点への解答

第3節 今後の課題と展望

参考文献一覧

図表

トルコ共和国大統領・首相一覧

トルコ-EU 関係

トルコが設立を主導したり関与した主な経済組織

平和活動一覧

中央アジア諸国

III 論文の概要

終章を含め、全8章から構成される本論文の主要内容は以下の通りである。

第1章「アイデンティティ研究の展開」では、国家行動の予測や分析を行うときに国家アイデンティティ(国家が保有する自己認識)が対外行動の重要な要素となることを論じた。その分析手法としてコンストラクティビズムのアイデンティティ論を用い、アイデンティティ同士の関係性に言及した。そして、国家アイデンティティを3種類(「内発のアイデンティティ」「外因によるアイデンティティ」「公的なアイデンティティ」)に分類したうえで相互関係を分析した。つまり、3つのアイデンティティは補完し競合したり、さまざまなパターンで関係しあい、それが外交に関与するのは、アイデンティティの間に不一致が生じる場合でありそれは外交を通じて調整されることを導きだした。

第2章「トルコの国家アイデンティティの形成」では、トルコ共和国が特異な地理的条件(ヨーロッパ・アジア・中東)や歴史的経験(イスラーム国家・ヨーロッパ・システムの一員、 balanサーとしてのオスマン帝国、世俗主義国家への変身)など、さまざまなアイデンティティの要素を包含していることから、アイデンティティの関係を検証する対象として優位性があることに注目した。言い換えるならば、トルコは「ヨーロッパの一員」であるとの自己認識を持つがそのことは周辺諸国から認知されていないため、その獲得のため「アイデンティティの確立」(周囲から承認されること)を外交の軸としてきた。このことばら、トルコはアイデンティティと対外政策の相互作用を分析するにあたり有効な事例であるとしそれを分析の対象とした。

トルコ共和国は、イスラームといった「内発のアイデンティティ」を否定し、西洋国家の一員という「公的なアイデンティティ」による近代国家の建設を目指した。しかし、自己認識と周囲の認識の不一致があり、とくにトルコとヨーロッパの間ではその不一致が明白である。一方、トルコは多様なアイデンティティを保有し多数の相手に対して「われわれ意識」を持つことが可能である。例えば、ヨーロッパともアラブともアジアとも「われわれ」意識を共有することが可能である。ここに「差異による対立」を超えるアイデンティティの利用の仕方を見いだせとの分析が可能となる。

第3章「トルコにおける政策決定者グループ」では、政策決定者の保有する国家アイデンティティが政策に反映されるとの仮説のもと、アイデンティティの担い手としてのエリート(政策決定者)に注目しそれを実証した。

トルコの政策決定においては、国軍が圧倒的な地位を占めていた。軍の優越性は、国民の軍への信頼感(独立戦争に勝利、アタチュルクの出身母体)、法的なシステム(国家安全保障会議など)による国家方針の指示(direction の意味)、軍の自己認識(国家の擁護者、世俗主義の擁護者)といった要因により支えられてきた。

そして国軍が「西洋アイデンティティ」を保有してきたところに要がある。軍をはじめとする世俗主義エリートの間(国軍のほかに建国初期のほとんどのリーダー、世俗主義政党、外務省)で政策決定権の交代が行われている間は「親西側」外交が継続された。また、軍自身も自己浄化によって「異分子」を排除し、純粋なアイデンティティの継承に努めていたのである。

第4章「トルコ外交と公的アイデンティティの形成と修正」では、建国期から1970年代までの対外政策を概観した。この期間は善隣外交から第二次世界大戦中の中立外交を経て、西側陣営 NATO への加入と変化していった。トルコにおいて NATO は、対ソ軍事同盟である以上に、西側の民主主義や自由など価値を守る存在として考えられた。トルコにとって NATO 加盟は西側の一員としての証明であった。キューバ危機やキプロス問題など、他の西側陣営諸国との外交問題はあったものの、「親西側路線」が一貫していた。これはエリートが西側アイデンティティを正当なものとしてきたためである。

特に NATO 加盟後、CENTO 設立(中央条約機構、SEATO と NATO をつなぐことが期待された中東の防衛組織)に見るトルコの積極姿勢は「西側よりも西側らしい」態度であった。

第5章「公的アイデンティティの再生産とトルコ外交」では、1970年代からの国内の騒擾(左右過激派によるテロの頻発)ののち、国民の再統合を試みた軍事政権によりそれまでアイデンティティの「階層」の下位に位置付けられてきた「イスラーム」が、公的アイデンティティを成すものとして上位に持ちあげられた(「トルコ・イスラーム統合論」というイデオロギーを軍事政権が宣伝)ことを論じた。こうしたアイデンティティの「重層構造」(複数のアイデンティティが階層に関係なく存在する状態)は外交にも作用し、「欧州のムスリム」といった言葉が、指導者層からでてくることになった。

第6章「ポスト冷戦期のトルコ外交」では、冷戦体制の終焉がトルコに新たなアイデンティティの模索を迫ることになったことを中心に論じた。トルコは異なる世界を結ぶ「懸け橋」を主張したが、逆にどこにも帰属できない国家というイメージが生じた(ハンチントン説)。また中央アジア諸国の登場により、トルコはトルコ・アイデンティティによる外交をとる結果となった。トルコ国内ではアイデンティティの重層構造(トルコ・イスラーム統合論の存在)によってイスラームが伸張し、イスラーム政権が登場したが、軍が政治介入し政権を奪取してアイデンティティの再生産が行われた。

しかし、21世紀以降、国内ではイスラームと西洋の価値観を持つ勢力が台頭し(敬虔なムスリムでありながらビジネスルールは欧米スタンダードを重視)、こうした勢力を支持基盤とする現 AKP 政権は外交の優先をどれかひとつに限定するのではなく、「中心国家」という外交を展開するようになった。(AKP 政権は、アラブとの関係改善を

進める zero problem with neighbors 政策が有名だが、目標はユーラシア、ないしは世界の中心国家となること)。AKP 政権の外交によって、「西側に背を向けた」とも言われているが、EU 加盟のための改革は過去の政権の中で最も多く行っている。

第7章「ケマリズムの継続とケマリズムへの挑戦」では、トルコの公的アイデンティティ＝世俗主義の根拠となっているのがケマリズムであり、ケマリズムは西洋社会の一員となることを目指すものであることを分析した。ケマリズムの担い手「西洋エリート」によって継承されてきた。次第に西洋エリート(国軍)は、ケマリズム以外の思想を拒否するようになり(ケマリスト以外は排除)、ケマリズムを現状維持のメカニズムへと転化させていった。

しかしながら、冷戦の終焉に見るような外的環境の変化は、トルコの異なる文明間の懸け橋としての役割を超え、中心的な存在になるという外交方針の変遷を促した。加えて EU 加盟への国内改革は西洋エリートを排除するとともに、「民主主義」意識を浸透させ、クーデタもイスラーム法も必要ないという国民の主張が大きくなっている。また、民主主義の進化は個人の自由というレトリックにより宗教の自由化を狙う。

終章では、以上の分析から以下の点をまとめた。アイデンティティは、a) 内発のアイデンティティ: 言語、民族、地縁、帰属意識に基づく、b) 公的なアイデンティティ: 国家目標あるいはリーダーの意識が強く反映された国家像、c) 外因によるアイデンティティ: 国際社会における役割や立場、イメージ、と分類できる。また、国家アイデンティティは多様な要因から成立しているが、どの要因を基にして国家アイデンティティとして用いるか、どの要素を強調するのかは人為的な操作による。さらに、権力をもったアイデンティティは、異なるアイデンティティを排除する傾向を持ち、エリートは政治的対立あるいは紛争の対立点としてアイデンティティを利用することが導き出せる。最後に、競合に勝った政策決定プレーヤーは、自ら保有する国家アイデンティティを政策に反映させ外交を展開し、周囲からの承認を受けようとする。外交が成功すれば、政策決定者の選択の正しさが明らかになり、支配の正当性が保障されるとともにアイデンティティにも正当性が付与される。これを繰り返していくと次第にアイデンティティの絶対化が起こり、そのアイデンティティを有するプレーヤーの存在も絶対化されていく。

事例から導き出されたトルコの国家アイデンティティ構造の特徴は、階層構造であると同時に重層構造でもある。まず、階層構造とは国家アイデンティティを成立させる要素が優先順位を付けられ、ランク付けされている状態である。重層構造とは、複数のアイデンティティが同時に存在し、階層の上位・下位はそれほど重視されていない状態を指す。構造の組み換え・交代(どちらのタイプを用いるか)は政策決定権を握るエリートが判断し操作する。その目的は自らの支配の正統性を確立することである。

トルコの国家アイデンティティと対外政策の関係は、外交の振れ幅はあるものの、西側アイデンティティが最後の一線となってきたが、決定的に西側との断絶には至らない。現在の AKP 政権による「中心国家」外交は、アイデンティティの重層構造を活用した外交であり、多様なアイデンティティの要素を外交に生かしていると考えられる。

IV.本審査内容

1 口述試験開催概要

審査日時:平成25年11月11日 1400～1530

審査場所:拓殖大学茗荷谷キャンパスD館306教室

審査委員:川上高司(主査、海外事情研究所教授)

鈴木佑二(副査、海外事情研究所教授)

森 伸生(副査、イスラーム研究所教授)

石井貫太郎(副査、目白大学教授)

2 質疑応答概要

【委員】良くできた論文であるが焦点を絞る必要がある。トルコはイスラム、ヨーロッパ、オリエント、西洋のいずれに属するのか。本申請論文では文明的トルコと国家アイデンティティが混在している。国家的アイデンティティとは何なのか、ベルギー、フランスの例をとればそれぞれ国家アイデンティティがあり独自の意向を持つ。しかしトルコはNATOには加盟したがEUには加盟できない。その対外政策で考えると、国家アイデンティティは多種多様でありその定義は如何。

【新井】国家内の構成員がばらばらでもトルコ人であるという「意識」があれば統一性が保たれる。その点、論文で論じた公的アイデンティティ、内発アイデンティティがあればその統一性は維持できる。

【委員】国家の発展と経済的要素の因果関係に関する議論が不足している。一般に、国家における経済発展の進行は、当該国家の政治システムを変容させ、ひいては外交政策の変化をもたらす重要な要因と考えられているが、本論文では主としてこうした問題に関する理論的な検討が十分になされているとは言い難い。

【新井】トルコのEU加盟については既存の研究の多くが経済的動機や軍事的動機に注目しており、本論ではこれらを否定するものではない。しかしながら、ここでは、より非物質的要因に注目したために、あえて既存の理論を振り返ることをしなかった。今後はこの点も研究枠を広げたい。

【委員】「国家アイデンティティ」を内発アイデンティティ、公的アイデンティティ、外的アイデンティティの3種類に分類しているが、これは誰の論議に寄ったのか？

【委員】その質問に関連して、「国家アイデンティティ」という概念の分類名称に関して議論が不足している。一般に、ある特定の概念を分類する作業においては、まずもって対立基準をもって概分し、しかるのちに各項目を細分化してそれぞれを理論化するのが慣行であるが、本論文の「国家アイデンティティ」では内発、公的、外因とそれぞれの分類名称の間に論理的な連関性が見られない。

- 【新井】ご指摘の通り、論理的関連性は明らかにされていないが、このような記述の仕方によって、論文の独自性と評価していただき、それぞれの「発生の仕方」の違いがわかりやすくなっていて本論文の目的は十分に達成している。しかし、ご指摘の点は今後の研究の課題としたい。
- 【委員】その問題点と関連して、「国家アイデンティティ」と外交政策とのリンケージに関する議論が不足している。この点は、経済発展による政治システムの変容という視点からの分析が足りない。また、操作概念の論理的な連関性の欠如という二つの弱点から導出される課題であると言える
- 【新井】国家アイデンティティと外交のリンケージについては、本論は、トルコ外交を形作るものとしてエリートのアイデンティティとトルコ独特のアイデンティティの構造に求めた。実際、トルコでは政策が一貫していた期間が長いために、本論ではリンケージについての言及が少ないように見えるにすぎない。変化に富んでいれば、リンケージがわかりやすいのである。またトルコでは、外交資料や政府関連資料が公開されていないことも多いこともご考慮いただきたい。
- 【委員】アイデンティティと対外政策の相互作用、どのようなプロセスを経て政策遂行へとつながるのか。
- 【新井】アイデンティティの競合とは、エリートによるアイデンティティの決定であり、アイデンティティを確立するための外交の展開が成功すれば、エリートの正統性が確立する。そしてアイデンティティの絶対化となる。

V. 審査結果

審査員より指摘された事項について、新井春美より論文本体の提出がなされ、12月16日、今回審査で取り上げられた諸点へ追記が可能な限り本論文に反映されたことを確認した。

VI. 論文の総合評価

1 審査所見

上記申請者の学位論文「トルコの国家アイデンティティと対外政策」は、申請者の本研究科在籍6年間における集大成となるものである。

本論文は、アイデンティティ論を用いて、国家アイデンティティを明らかにし、トルコを事例としてアイデンティティと対外政策の関係解明をめざしたものである。アイデン

ティティ論は、国際関係論のコンストラクティビズムの影響を受ける思考体系である。その理論的發展にはケーススタディが不可欠であり、本論文のトルコの事例研究が国際関係論の中で再解釈された点でトルコ研究にとっても重要な貢献となると考えられる。

本論文は、終章をいれて8章構成になっており、第一章「アイデンティティ研究の展開」で、アイデンティティ論を展開するとともに国家アイデンティティを明らかにした。すなわち国家アイデンティティには「内発」(言語、民族、地縁、帰属意識に基づくもの)、「公的」(リーダーの意識を反映したもの)、「外因」(国際社会での役割、立場)の3つがあり、それぞれが相関関係を持つ。その3要因が不一致することがあるがそれは国家が外交政策を展開する際に外部からの「認証」により調整されると論じる。

そして第二章から第七章まではトルコを事例としてアイデンティティと対外政策の関係を論じている。すなわち、第二章「トルコ国家のアイデンティティの形成」でトルコ国家のアイデンティティ分析を行っている。それはイスラーム(内発)と世俗主義(公的)の構成要素に欧州とイスラームの両者のアイデンティティの融合である結論づける。第三章「トルコの政策決定者グループの分析」ではトルコの外交政策を軍とエリートに焦点をあて3期(1923～70年代、1980年代、ポスト冷戦期)にわけ論じ分析している。その上で、第四章「トルコ外交と公的アイデンティティの形成と修正」(1923～1970年代)、第五章「公的アイデンティティの再生産とトルコ外交」(1980年代)、第六章「ポスト冷戦期のトルコ外交」で、それぞれの時代毎のトルコ外交とアイデンティティとの関係を分析した。さらに、第七章「ケマリズムの継続とケマリズムへの挑戦」では、世俗主義に収斂されるケマリズム(6原則)を論じケマリズムの担い手としての共和人民党、国軍に焦点を当てた。その上でトルコが世俗主義国家、西洋国家としてのアイデンティティを再生産してきたこと、そして21世紀ではさらに新しいアイデンティティが成長しつつあることを分析した。

また、本論文は、3つの重要な結論を導きだしている。第一はトルコ国家アイデンティティの構造は、階層的構造(国家アイデンティティ構成要素に優先順位がある)であると同時に重層構造(複数のアイデンティティがあり階層は重視されない)である。第二は、トルコにおいてアイデンティティ生産・再生産のメカニズムは、「国民統合」か「エリート交代」の場合に働く。第三は、アイデンティティと対外政策の継続は一致することであり、国内変化が国家のアイデンティティを変化させる。このように、アイデンティティと対外政策との関係につき、トルコのユニットレベル(特にエリートの動向)に焦点を当て研究を行いその外交政策が一貫性を継続してきたことを立証できたことは大きな成果であったと考えられる。

また、本論文は豊富な現地調査と特に英文を中心とした外国語文献の成果を踏まえて議論を展開しており、また、日本では稀少なトルコ共和国の政治を分析対象とした研究であることに加え、1980年代に輸入されて以来わが国では立ち消えの状況にあったアイデンティティの国際政治学的研究を復興させた研究でもある。さらには、政治学と社会学の双方の領域にまたがる意欲的な労作として高く評価できるとともに、

何よりも日本の今後の対トルコ外交への重要な参考文献となりうるものである。

2 審査委員会結論

学位論文審査委員会は、事前に提出された学位論文申請書、学位論文要旨、学位申請者略歴等をもとに、数回の会合を重ね厳重な審査を行った。最終的には、平成 25 年 11 月 11 日の口頭試験およびその後の審査委員会で審査委員全員一致で学位申請者に対し、提出論文が「博士(安全保障)」の学位授与に値するものであることを認めた。